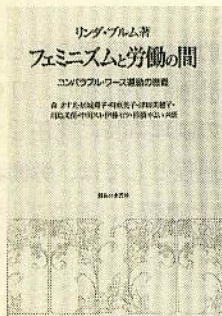


書 評

『フェミニズムと労働の間』コンパラブル・ワーク運動の意義

リンダ・ブルム著 森ます美他共訳 御茶の水書房 定価5356円 303頁

塩田 長英 (明海大学教授)



リンダ・ブルムさんはフェミニスト社会学者を志し、努力してこの博士論文を完成された。謝辞と目次、それに第1章に目を通しただけで、この問題の大きさと重さに圧倒され

てしまう。専門的、理論的しかも実証的な姿勢は、同学・同志の人々を励ますに違いないが、逃げ出してしまいたい人々もまた多く出たろう。

逃げてしまって問題は解決できるかといえば、ほとんどの問題は解決しない。だがそんな時には、私には関係なく誰かが解決してくれると希望・期待するか、そんなことも考えないで知らぬ振りをするか、突然降って湧いたカタストロフに身を委ねるか、駄々を捏ねて最後までしがみつুকといった選択が見えてくる。

男女平等の問題は、多くの人々にこのような態度をとらせてきた。さまざまな段階で現状の維持と既得権益の擁護がもっとも無難であると考えてきたからだと思う。家庭内の夫、企業の経営者、労働組合の指導者、行政の官僚、政治家などなど、多くは男性だが、女性も例外ではなかった。

リンダ・ブルムさんは、この現代社会、もちろんアメリカ社会、における女性の労働を、いかに平等たらしめるかを、これまでの労働運動・フェミニズム運動、加えてマイノリティ運動の立場を分析し、具体的な政策と運動の事例に展望を見出そうとした。

その具体的な対象がコンパラブル・ワース (Comparable worth) とペイ・エクイティ (Pay Equity) である。これは同一労働同一賃金に他ならないが、なぜこんな当り前のことが大上段に振り被らなければならないかといえば、まさに男

女、ジェンダーにおいてそれが最も理解されず無視され破られているからなのです。こういう当り前のことを理論付け、運動し支持を受けねばならないなんて、まったく腹立たしく空しく怒りと絶望が交互に沸き上がってくるでしょう。でもここでは冷静に詳細に分析され紹介されていますから、リンダ・ブルムさんの力量に敬服します。

仕事の価値を細かに分析して比較するときは、差別を作るときが多いと思う。企業ではいつでもどこでも試みられている。それを逆手にとって平等へ一歩でも近づこうとする努力は評価に値します。アフーマティブ・アクションの持つ弱点、大雑把な解決策を超えるものがあるからだろう。でも平等とはそうした試みだけでは実現しない気がする。こんなに人間を尊重しない、人間味のない社会を続けてきた私たちが、どうすれば人間性を回復できるかということですから。

資本主義の発展は、生産現場に分業という仕組みを置いたことでも知られているが、現代の日本やアメリカでは、家庭内に過度の分業が生み出されています。家族賃金はこれを促進しました。夫は働き蜂、妻は家事労働、子供は次代を背負う宝、などという分業が行き着く先はカタストロフ・崩壊に決まっている。それぞれの分業からどれほど解放されるかによって、カタストロフから免がれる可能性が出てくるでしょう。ひょっとするとそれで生産力がさらに高まって資本主義を成長させるかも知れない。それに気が付く社会が、資本主義間の競争で先んじるのではないかと思ったりするのです。